

# 日本人と中国人のコミュニケーション

## ～孔子の正名論と万葉集の言霊から学ぶ～

高等教育推進センター  
教授 ウヴェ・リヒタ

### 1 はじめに

皆さんは猪八戒をご存知ですか。孫悟空、三蔵法師、沙悟浄と一緒に取經を目指しインドへ行った中の1人です。その猪八戒はもともと天界の将軍で、あまりにも女性が好きで、ブタになってしまいました。1980年に北京大学を終えてから、5年に1度ほどの頻度で中国へ行っておりますが、以前、北京大学の学生時代に一緒に暮らした中国の友人の所へ30年ぶりに訪れました。その際、玩具店で授業に使用する為、猪八戒の武器でもある「熊手」を購入しました。

そして日本へ帰国の際、北京空港のセキュリティーチェックの所に、女性3人、男性3人の6人の若い職員がおり、持ち物の検査が行われました。その際、私は購入した「熊手」を背負っていて、それが男性職員の目に留まりました。「それは何ですか」と男性に聞かれ、私は「これは俺の武器だ」と答えました。すると彼は、この外国人は西遊記を知っているのだ、ではどのぐらい知っているのか確かめてみよう、と思ったのでしょうか。彼：「如意棒はどこですか」、私：「それは仲間の

武器です」、彼：「では仲間はどこですか」、私：「彼はハワイに行きました」、彼：「どうしてハワイに行くのですか」、私：「ハワイへ仏教を勉強しに行きました」、話がめちゃくちゃです。そして、彼：「あなたはどこに行くのですか」、私：「僕は日本に行きます」、彼：「なぜ日本？」、私：「女の子がきれいだから」と、この調子で6人と2～3分会話を楽しんでいると、後ろにはお客さんの長い行列ができていました。このような事は成田空港では考えられません。

成田空港のセキュリティーチェックの職員は非常に礼儀正しく、効率の良いすばらしい仕事をしていますが、ジョークを言うことは絶対にありません。この例から2つの事が見えてきます。1つは日本と中国のコミュニケーションの違い、もう1つはユーモア観です。これも国、文化によってずいぶん違います。

## 2 中国のコミュニケーションの原点

毎年、最初の授業で、50名ほどいる学生の中に中国の留学生もいますが、10秒ほどで中国人を見分ける方法があります。ドイツ語で、「グーテンモルゲン（おはようございます）」と言うと、日本の学生は、一呼吸置き、みんなの準備ができてから、一斉に「グーテンモルゲン」と言います。しかし中国人は周囲を待たずに各々に言います。ただそれは最初だけで、半年も経つと周りと同様に、一斉に言うようになります。

また、中国を旅すると、中国の映画、議論する番組などで、激しい議論の攻防があり、相手を説得し、相手に打ち勝とうするような激しい雰囲気がかかります。軍事的な言葉で言うと接近戦が行われる、これが中国の一般的なコミュニケーションの方法です。そのような遠慮

しないスタイルを代表するキャラクターが、中国の孫悟空です。

中国の孫悟空と日本の孫悟空はだいぶ違います。1964年の中国の孫悟空のアニメ映画がありますが、この孫悟空は造反有理精神の原点の1つであると思います。彼は造反、反抗する精神そのものです。

孫悟空は世の中に様々な混乱を起こすので、天宮へ招待し、何かポストを与えれば落ち着くのではないかと考えられました。しかしながら、天に対し全く畏敬の念を抱かず、ポストを与えられても孫悟空には務まらず、その様な調子で彼は天宮を大混乱させてしまいます。孫悟空は反抗する、それが中国の文化そのものです。そして、中国のコミュニケーションを理解する為の鍵だと思います。

北京大学の学生時代、中国の友人との会話の中で、彼は「北京大学生が議論したとして、2人が同じ意見を言うのなら、1人は馬鹿だ」と言いました。つまり自分の考えを持たないのは良くないという事です。それほど厳しいのです。

### 3 『論語』と『万葉集』

中国と日本のコミュニケーションの違いの原点はどこにあり、いつからできたのでしょうか。私の理論ですが、2つの作品の中に重要なキーワードがあると思います。まず1つは、孔子の『論語』の中の「正名論」。そして、もう1つが『万葉集』の「言霊」です。

『正名論』の中で子路（孔子の弟子）は、「衛の君主が先生を迎えて政治をするならば、一番先に何をなさるつもりですか？」と聞きます。そして、孔子は、「名を正すことですよ」と答え、生徒は驚きます。要するに、正しい事は正しい、悪は悪だとはっきり言わないと社会に混乱が起こると述べています。

一方、『万葉集』には言霊思想というものがあります。「靈」の字は巫女が一生懸命「雨降れ」と念ずると雨が降ると書くように、言葉には霊的な力があると言うのです。中国の文化も日本の文化も言葉にはスピリチュアルな力があると考えられています。しかし、日本の文化では、言葉は一度口に出してしまうと取り返しのつかないものとなると考えます。

私は、日中文化の大きな違いの1つは、中国の文化は言葉で国を治めることができると楽観的であり、日本の文化は物事をはっきり言う事に対して慎重であることと考えます。例えば、芭蕉の俳句「物言えば唇寒し秋の風」、寅さんの「それを言っちゃあおしめえよ」、三船敏郎の「男は黙ってサッポロビール」、また、CMのトミー・リー・ジョーンズの「ただ、この惑星では無口なほうがもてる」などがあると思います。

#### 4 社会背景からの文化の違い

日本語はおもしろい言葉で、「妻」という漢字に「にすい」をつければ「凄い」になります。幾つかのキーワードを見てみましょう。「人間」という言葉は中国になく、中国語は「人(レン)」だけです。つまり「人間」には、人と人の「間」があり、それは礼儀、あるいは社会性を表しているのでしょうか、その間が無ければ「間抜け」となります。つまり人間というのはその周り、世間の一部であるという事です。また、和辻哲郎(1889-1960)は著書『風土—人間学的考察』(1935)で、哲学の中心的概念を「間柄」として述べています。

そして、「分」という言葉も重要です。例えば「自分」、それも中国語にはなく、あるのは「自己」です。「自己」と聞くと、日本では「自

己中心的」等と使われるためあまり良いイメージではないかもしれませんが。一方、「自分」というのは、その周りとの深い関係があって、その周りの一部「分」が「自分」であるという意味を持ちます。

また、中国語で自分という意味で最も一般的に使われている「我」という字ですが、それは戦闘的な言葉で、手に武器を持つという意味を持ちます。一方18世紀から日本の女性が使ってきた「私」は、自分のことをよく理解しており、他の人に対しては謙遜が出来るような意味を持っています。

そして、コミュニケーションの違いができたのは、2,500年程前の中国の戦国時代、何百年にわたって20国ほどの国々が争い、国の群集に向かって自分の政治コンセプトを主張する哲学者や政治家が出てきました。様々なコンセプトがあり、人を説得する能力を持たないと競争できませんでした。

中国とは違い、日本では「禪」の様な優しい仏教文化が中心となりました。「禪」では言葉は重要ではなく、修行者が悟りを開くための手段である公案も議論をなくそうとするものでした。

## 5 「詩」と「科挙制度」からの社会への影響

2つの分野で両国の社会や考え方に大きな影響を及ぼしたものがあります。1つは「詩」、もう1つは「科挙」です。

まず「詩」についてですが、日本文化、中国文化の両方で詩はとても重要です。中国の詩は人間と社会を重視します。中国の『詩経』という2,600~3,000年前にできた詩集は、孔子が編集しましたが、4,000位の詩経の詩から男女関係、愛を歌う詩を全部省き305の詩を選んで、編集し、個人と国の関係を書くようにしました。これに対して日本は

『源氏物語』のように男女の愛、小説に出る人物の精神、心理的な考え方を書いています。『源氏物語』は、世界文学で最初のモダンな小説だと言われています。ヨーロッパでは、そのような小説は19世紀まで出てきませんし、中国にも男女の愛を書いた小説はありましたが、非公式的でプライベートの場で読むものでした。

もう1つは「科挙制度」です。中国では唐時代から役人の採用試験があり、そのすぐ後、韓国にもできました。日本にはそのような制度はありませんでした。その理由は、専門家の中で様々な説がありますが、1つは、中国は巨大な国であり、政治、国家管理や国家公務員の仕事ができる、有能な人材を探すためということです。科挙で成功する人は、ごく一部で、多くの人は一生涯に何回挑戦しても合格しません。しかしながら、科挙のために論文を書き、議論するような知識人が地方にも現れます。一方、日本は小さな国で、人材を探すのは容易でしたので、そうした制度はありませんでした。

日本には「腹芸」があります。松本道弘（1940-）著の英語版『腹芸』（1988）という本には、「腹芸」は定義上、「debate(議論)」とは全く反対のものであり、「Don't tell the truth, but don't tell lies. (本当のことを言うな。でも嘘もつくな)」、「Don't define yourself. (自分のことを定義するな)」、「Don't say "no". (ノーと言うな)」、「Don't justify yourself. (自分のことを正当化するな)」、「Don't attract attention to yourself. (皆さんの注目を引くな)」、「Don't be direct. (直接的にものを言わない)」、「Don't ask why. (なぜ、どうしてと聞くな)」等と述べられており、日本人のコミュニケーションの特徴を捉えていると思います。

数年前中国で李兆忠著の『曖昧的日本人』（2005）と言う本を購入

しました。その本には、浮世絵の春画を取り上げて、日本人は曖昧ではっきりものを言わない、いつも男女の愛ばかり考えている国だととらえられています。そして、中国人から見ると日本人は、理ではなくて気によって動いており、つまり論より情けを重要としていると思います。

## 6 ユーモアの違い

ユーモア、それは普遍的なものであると思います。ユーモアの1つの形はジョークで、ジョークの原点は欧米にあります。そして、そのジョークもコミュニケーションも長い文化の歴史と社会の産物であり、歴史の理解なしにユーモアもジョークも理解できません。ジョークを言うという事は「私はあなたの敵ではありません。豊かで愉快的な雰囲気を生懸命つくりたいです」という思いが隠れています。日本には漫才がありますが、それはジョークとは少し違います。個人的には、ユダヤ文化のジョークが一番おもしろいと思います。

ユダヤ人は、差別、虐殺、迫害などで長い間苦勞に苦勞を重ねて、そのようなジョークの文化ができました。その苦勞をジョークで克服しようとしたのだと思います。例えば、社長がユダヤ人の従業員を呼びつけ、「おまえはクビだ」と宣告します。すると従業員は「えっ、どうして?」、社長：「おまえたちユダヤ人は、キリストを殺したからだ」、従業員：「いや、それは2000年前の話じゃないのですか」、社長：「知らなかった…」というジョークがあります。世の中には本当にお馬鹿がいるのでしょがない、どんなに頑張ってもやられてしまうのだ、ということを表しているジョークです。

また、イギリスのユーモアの特徴はブラックユーモアです。ブラッ

クユーモアとは倫理的に避けられるタブー、例えば生と死、差別、偏見、政治などについての風刺的な描写やネガティブ、グロテスク、皮肉を含んだジョーク、コメディ、ユーモアを示す言葉です。

多くのイギリス人はジョークを言うと助け船を出しません。イギリス人は、ジョークですよ、笑ってもいいよと言わずに、「Deadpan face」、つまり「死んだフライパン」のような顔をつくってジョークを言います。日本で例えるならば、のっぺらぼうのような顔をしてジョークを言います。そして、相手が理解しないと、「理解できない方がバカだ、ざまあみろ。」と言うような厳しい態度なのです。

## 7 浮世絵から西洋美術への影響

江戸時代、農民は道端で殿様に対して笑顔を見せてはいけませんでした。ヨーロッパでも同じでした。笑う、笑顔を見せる、歯を見せるということは、強い、自信を持つという意味にとらわれてしまいます。そして、18世紀イギリスで初めて漁民の女の子が笑顔を見せた絵画（ウィリアム・ホーガース作『小海老を売る女』1745年頃）が発表されました。現代ではごく普通ですが、あの時代の市民は、権力者に対して自信を見せることは許されませんでした。

数年前、20年以上日本に住んでいるインド人の友達は、日本人にはユーモアがないと言いました。たしかに、東アジアの中国、韓国、日本にそのようなジョークを言う文化はあまりないのですが、ユーモアが無いということではないと思います。

1860年代、開国した日本からやってきた美しい工芸品や浮世絵に西洋人は驚きました。日本の浮世絵などからヨーロッパの美術にたくさんのイメージが入り、多くの美術芸能人はその影響を受けました。例



えばモネ、ゴッホ、ムンク、そして春画の影響を受けたピカソ。幾つかのピカソの作品の中には春画がはっきり表れています。

春画、それは人間の性について、ヨーロッパ人にとって全く新しい見方でした。19世紀の西洋では、禁欲主義的な考え方や思想が支配的でしたが、春画が持ち込まれ、ユーモラスな感覚で人間の性を見ます。また春画には、それぞれの画のユーモアさの裏に、人間は知だけではなく性も重要であることや性的暴行への批判などのメッセージも込められています。

## 8 おわりに

最後になりますが、ハリウッド映画のジョークについても触れたいと思います。メル・ブルックス監督の『ヤング・フランケンシュタイン』という1974年のパロディ映画の1シーンです。ルーマニアのトランシルバニアのフランケンシュタインの城で、老家政婦のブルッヒャー夫人がフランケンシュタイン博士を迎える場面です。その際、ブルッヒャー夫人は強いドイツなまりの英語で「I am Frau Blucher（私はブルッヒャーです）」と言います。その後も“ブルッヒャー”という言葉が出るたび、空にいなづまが光り、フランケンシュタインが使ってきた馬車の馬は後ろ足で立ち上がり、恐ろしく、ヒンヒンと声を出します。実は、“ブルッヒャー”という名前はワーテルローでウェリントン将軍と一緒にナポレオンを破った人のもので、西洋人や戦地で亡くなった馬にとっては攻撃的で恐ろしいイメージを持つ名でした。さらに、日本語の訳では、「私はブルッヒャー夫人」ではなくて、「私はバニク・クー」と訳していたそうです。バニー、それは女性の名前や可愛いウサギを連想させます。そして「クッカー」、これには2つの意

味合いがあり、1つは鳥のカッコウ、もう1つは“気が狂った、愚かな”という意味です。したがって、名前自体がおもしろいという事になります。そしてもう1つ、「私は馬肉を食う」と言う意味にもなります。すると、もちろん馬は恐ろしいと思うでしょう。これは天才的な翻訳であると思います。私も映画を見ましたが、ジョークは3割しか理解できませんでした。このように、ハリウッドの映画はいろんなほめかしがあります。

### 【参考文献等】

ハンス＝ディーター・ゲルファート著・渡部貞昭訳『独英ユーモア小史』窓映社、2003年

Li Zhaozhong 李兆忠, *Aimei de Ribenren* 曖昧的日本人[Die unklaren Japaner]. Beijing: Jincheng chubanshe 2005.

*Lunyu. The Analects of Confucius*. Translated by Burton Watson. New York: Columbia University Press 2007.

*Manyoshu: The Manyoshu. The Nippon Gakujutsu Shinkokai Translation of One Thousand Poems*. New York: Columbia University Press 1965.

メル・ブルックス（監督）『ヤング・フランケンシュタイン』（映画）、1974年

Michihiro Matsumoto 松本道弘, *The Unspoken Way Haragei: Silence in Japanese Business and Society*. Kodansha International 1988.

ラビ・M・トケイヤー著、加瀬英明訳『ユダヤ・ジョーク集』講談社、1994年

Rosina Buckland, *Shunga : Erotic Art in Japan*. London: British  
Museum Press 2010.

和辻哲郎『風土—人間学的考察』岩波書店、1979年

万籟鳴、唐澄（監督）『大鬧天宮』（アニメ映画）、上巻1961年、下巻  
1964年